

〈修士論文要旨〉

戦後開拓地に関する研究

— 岡山県蒜山開拓地を事例として —

黒川 英雄*

1. 研究の目的

戦後開拓とは第2次世界大戦後の食糧増産と失業者救済、社会不安の解消を目的に行われた「緊急開拓事業」のことである。この事業の目標は、5年間に内地85万戸、北海道20万戸、計100万戸を帰農させて内地85万町歩、北海道70万町歩、計155万町歩の開墾、10万町歩の干拓を実施し、米、麦、豆類、蕎麦類、雑穀など、米に換算して1600万石の生産を挙げるものであった¹⁾。このような戦後開拓は自然条件の制約から従来、農業生産限界地として放置された地域を中心に展開されてきた。

戦後開拓に関する研究は地理学を中心に社会学や経済学でも様々な視点で行われてきた。しかし、終戦から60年以上が経過し、開拓の役目を終えた現在では、戦後開拓集落として維持されている地域は少ないと思われる。そこで本研究では戦後開拓で一定の成果を収めた岡山県蒜山地域を対象に、従来の研究と同様に当時の状況を検討するとともに、戦後開拓の役目を終えたその後の変化について明らかにすることを研究の目的とした。

2. 蒜山開拓の概要

蒜山開拓は岡山県の西北、伯耆大山の東南部に位置する大山火山群の一部をなす鐘状火山「蒜山三座」(=上蒜山(1,200m)・中蒜山(1,123m)・下蒜山(1,100m))の南に東西に緩やかに広がる面積約2,200ha、標高550~700mの裾野に位置する。この地域の気候は山陰地方と似ており、気温は県南地域と比べ約2.5度低い。一方、年間降水量は1,900mmを超え、県南地域の約2倍である。冬季の特徴は降雪で、北西の季節風が大山の西方から日本海側の雲を送り込むためである。無霜日数は年間150~60日程度と短く、気候条件は岡山県では最も厳しい地帯である。

終戦後、「緊急開拓実施要領」の承認を受けて、この地に広がっていた陸軍の演習場は畑作主体の大規模開拓地区に指定され、1945(昭和20)年の12月には農地開拓営団が発足、新規入植が始まったが、自然条件・社会条件が劣悪であった蒜山開拓は最初の約10年間は国の経営診断で不振地区と断定され、何の希望も見出せなかった。しかし、前述の経営診断は蒜山開拓の歴史で、転機をもたらしたといえる。不振地区と認定されたために、大規模な振興計画が認定されたからである。さらに、一部の入植者が生産した美濃早生大根が好評を博し、蒜山の特産物として販売
平成18年度 *文学研究科地理学専攻

体制を確立させたこと、国や県の強力な酪農振興政策によって、蒜山地域にジャージー種乳牛の集約酪農地域が形成されたこと、財務整理の成功により、組合員の信頼関係を呼び戻し、組合の行う各種事業の積極的な推進の原動力的役割を果たしたことによって成功を収めたのである²⁾。

3. 蒜山開拓地の変遷

次に、戦後開拓の役目を終えたその後の変化を調査するにあたり、まずは統計の面から分析を行うことにした。そこで、本研究では農業集落カードの1970年～2000年のデータを用いることにした。その結果、以下のことが明らかになった。

- ①農業を営んでいる人は年々減少しているが、総戸数が比例して減少しているわけではないので、農業をやめても引き続いてその土地で生活していると思われる。
- ②農業を営んでいる人は男女間に差が無いことから夫婦で自営農業をしていると考えられる。また、1995年においても、ほぼ半分以上の人が「自営農業のみ」に就いていた。
- ③農業経営においては、露地野菜（大根栽培）が中心である。農家数が減少する一方、1戸当たりの耕地面積は増加していることから、経営規模拡大が認められる。
- ④酪農は農家全体の割合から見ると少ないものの、農産物販売金額1位の農家数に大きな変化がないことから安定した経営をしていると考えられる。また、露地野菜とは違い、開拓集落全体でみられるわけではなく、集落によって明確な差がある。

したがって、全ての農産物で農家数の減少と規模拡大が認められるといえよう。

続いて、開拓地の発展に大きく貢献した大根栽培とジャージー酪農のその後について調査したところ、まず大根栽培は1980年代に入って土地の酷使が原因である連作障害の表面化により、状況が一変した。平成2年度までは何とか400haを保っていたが、それ以降年々減少し、平成13年度には遂に100haを切っている。市場評価は下がり、生産者も少なくなった。そして、2005年には真夏の出荷をやめた。そこで「量から質への転換」を思い立ち、蒜山のブランドをつくろうと4年前から始まったのが「こだわり大根」の生産である。「こだわり大根」の最大の特徴は「寒締め」という手法を用いていることである。これは野菜に霜を適度に降らせ、味をより良くさせる手法である。しかし、生産を始めてから日数が浅く、これから先のことに関しては不透明な部分が多い。

一方酪農では、1960年代になると開拓地では美濃早生大根が脚光を浴び、栽培面積を拡大するなかで、労働力や土地利用の面で競合したため酪農戸数の伸びに停滞傾向が現れ、以降急速に減少していく。更に、脂肪率の高さよりも乳量が高く評価され、ジャージー種の優位性が失われると、乳量で勝るホルスタイン種が導入され、一時は飼養頭数でホルスタイン種が上回るほどの減少を見た。そこで、蒜山酪農農業協同組合（以下、蒜酪と略称）はこうした状況を打開するため、ヨーグルトやチーズなどの乳製品の開発に取り組んだ。また、乳製品の収益からジャージー牛をより振興させるための奨励金制度を設け、育成技術、飼料給与技術の向上を生産者、県、蒜酪などが一丸となって推進してきた。その結果、ジャージー種は再び増加傾向を示し、日本有数のジャージー牛の産地として定着したのである³⁾。

4. 蒜山開拓地の現況

次に、農業集落カードの分析を踏まえ、畑作と酪農の両方を見ることが出来る共和地区を代表事例として、現地調査（聞き取り調査）を行った。その結果、農業専従者が夫婦となっている場合が圧倒的であることが明らかとなった。そのため、家族の死亡といった家庭的事情が農業をやめる要因となっている。その一方で、前述の連作障害を理由にやめた人を確認することができず、他の作物に切り替えた人も、農作業の負担軽減や、収入のためといった理由であった。耕地面積でも、規模拡大の様子を認めることができず、開拓時代の隆盛は残っていないと言わざるを得ない結果が出た。

酪農では、5軒から酪農を営んだことがあるという回答を得た。このうち、現在でも酪農を営んでいるのは3軒であったが、ホルスタイン種の導入、フリーストール牛舎を採用するなど各々の方法で安定した経営を継続していると思われる。

5. おわりに

開拓地の発展に大きく貢献した農業は大きく変化した。しかし、開拓民はこうした流れに対応してきたかといえば、大根農家と酪農家で明暗がはっきりと現れているといわざるを得ない。大根農家は前述した連作障害を直接の原因に挙げた事例は確認できなかったものの、大きく減少していた。その上、やめた理由として家族の死亡といった家庭的事情が目立ち、現在でも営んでいる人も、夫婦での自営農業という就業形態を継続しており、後継ぎがいなければ今後も減少していくであろう。一方で、酪農は開拓時代と比べれば、飼養農家数は減少したものの、当初から酪農で生計を立てていた戸数はほとんど変わらず、日本有数のジャージー牛の産地として安定した経営の継続に成功しているといえよう。

大根栽培は「こだわり大根」の誕生によって、新たな局面を迎えたことは間違いない。しかし、生産者の減少・不足を避けることは厳しいであろう。開拓時代、事業推進母体としての機能を果たした農協には、「こだわり大根」の生産拡大のためにも、新たな生産者の育成に取り組む必要があるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 戦後開拓史編纂委員会「戦後開拓史 完結篇」、1977、5ページ
- 2) 岡山県戦後開拓史編纂委員会「岡山県戦後開拓史」、1978、484～516ページ
- 3) 平成17年度畜産大賞・詳細資料「日本一のジャージー牛産地の育成と6次産業化への取り組み」、蒜山酪農協同組合、103～114ページ